令和４年度　特選コース

第２回　入学試験問題　（２月３日　午後）

Ｓ特チャレンジ

国　語　（50分）

注　意

１　この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
２　問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
３　答えはすべて解答用紙に記入すること。
４　**字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「　」（　）などの記号を含んだ字数として解答すること。**
５　印刷がわからない場合は申し出ること。
６　試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	

一

次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

1、清貧に暮らしていこう。
2、物事の筋道が通らない。
3、あの人は著名な音楽家だ。
4、米俵をかつぐ。
5、全力を奮って戦う。
6、疑われた友人をベンゴする。
7、たくさんのコバンが発見された。
8、サクヤのできごとは忘れられない。
9、この上なくツウカイな気分だ。
10、墓に花をソナえる。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

美咲は、一人息子の悠人（ゆうと）と「三歳児教室」へ行った帰り、一軒のオルゴール店に立ち寄った。その店は、不思議な静寂（せいじゃく）の漂（ただよ）う、妙にひきつけられる雰囲気に彩られていた。この店を紹介するチラシを手にした美咲は、そこで、独特な居ずまいの店員に出会うことになる。

宣伝文句の下には、組みあわせの例がいくつか挙げられ、値段の目安も記されている。千円台から数万、数十万まで幅広い。オルゴールといえば土産物屋で見かけたことがあるくらいで、専門店に入るのははじめてだが、けっこう奥が深いものらしい。この界隈（かいわい）には何度も来ているにもかかわらず、こんな店があるとは知らなかった。①年季の入った店がまえからして、最近できたふうでもない。道を挟んで向かいにある、古びた喫茶店には見覚えがあったから、前を通ったことはあるのに見落としていたのだろう。

不意に、なつかしい、可憐（かれん）な音色が耳に飛びこんできた。美咲はチラシから顔を上げ、[A]した。

悠人がいない。
あせって首をめぐらせると、奥のテーブルの手前に、小さな後ろ姿が立っていた。とっさに、大きな声が出た。
「悠人」
オルゴールの音がぴたりとやんだ。
やや背をまるめ、テーブルを挟んで悠人と向かいあっていた店員が、美咲を見た。②一拍遅れて、自分の肩あたりまである机の縁に両手をかけて彼の手もとをのぞきこんでいた悠人も、顔を上げた。
それから、彼の視線をたどったのだろう、美咲のほうを振り向いた。
「すみません」
美咲はふたりに駆け寄った。悠人は不安そうにおとなたちを見比べている。
「いえ、こちらこそ説明もせずに、失礼しました。そこにあるのは全部見本なので、自由にさわっていただいてかまわないんですよ」
美咲の頬が、③かっと熱くなった。
そうだ、ここに並んでいるのは、置きものでも精密機械でもない。いくら熱心に見つめても、それだけではオルゴールの中にどんな音楽が封じこめられているのかはわからない。ためしに聴いてみようとするのはごく普通のことだろう。親子連れだったら、母親がひとつ手にとって、子どもに聴かせてやるところかもしれない。
もし普通の親子連れだったら。
「動いてるほうが、おもしろいですよね」
店員は再び手首を回し、オルゴールを鳴らしはじめた。美咲にも聞き覚えのある、古い子ども向けのアニメの歌が流れ出す。今もまだ放映しているのだろうか。近頃はほとんどテレビをつけないのでわからない。
「音が見えますからね」
店員が楽しそうに続けた。
美咲はあらためて器械に目を落とした。チラシにも書かれていたとおり、円筒を横に倒したかたちの部品と、櫛の歯のようなひらたい部品が、くっついて配置されている。透明な箱から突き出した持ち手を回すと、筒が動き、表面の細かい突起が並んだ歯をはじく。
確かに、音が見える。
「ひとつ、いただけますか」
気づいたら、美咲はそう言っていた。

「お母さんに？　それとも、お子さんに？」
店員が微笑(ほほえ)んだ。手は休めない。悠人はかすかに首をかしげ、彼の手もとを凝視(ぎょうし)している。悠人の耳は大きい。なめらかな曲線を描いた耳たぶはふっくらと厚く、いわゆる福耳と呼んでいいだろう。
こんなに立派な耳がその機能を果たしていないなんて、本当に信じられない。
「息子に」
と、美咲は答えた。

店員はテーブルの前に折り畳み式の椅子(いす)を出して、美咲と悠人を座らせた。
「器械の種類と、外箱と、あとは曲目を選んでいただきます」
器械は最も安い、音域の狭いものにした。それでも十八音が出せるのだから上等だ。店員いわく、市販されているオルゴールはたいていそれらしい。外箱のほうは、出してもらった見本の中から、悠人が迷わず青い木の小箱を指さした。
曲目を決める段になって、困った。
「息子さんに、ですよね」
店員はひとりごとのようにつぶやき、悠人に向かってたずねた。
「なにかお好きな曲はありますか？」
おとなに対するような、丁重(ていちょう)な言葉遣いだった。あまり子どもに慣れていないのかもしれない。妻子持ちでもおかしくない年頃のはずなのに、おっとりした口ぶりも華奢(きゃしゃ)な体つきも、どうも生活感がない。
話しかけられた悠人は、まばたきもせずに店員を見つめている。耳をすましているように、見えなくもない。
「曲のリストみたいなものってありませんか？」
美咲は口を挟んだ。
「すみません。あることはあるんですが、お子さん向けのものではなくて。漢字ばかりなので、読みにくいかと」
「かまいませんよ。わたしが読むので」
「えっ」
店員が［B］した。
「でも、息子さんのオルゴールでは……」

「はい。ただ、この子が自分で選ぶのは難しいですから、わたしがかわりに」
「はあ、そうですか」
あからさまに眉をひそめられ、美咲は少し［C］した。④まるで、子どものものを親が勝手に決めるなんてかわいそうだといわんばかりだ。
「あの、もしよかったら」
彼は遠慮がちに続けた。
「こちらにお任せいただければ、ふさわしい曲をおすすめできますが」
そういえば、チラシにもそんなことが書いてあった。
しかし納得いかない。専門店の店員とはいえ、見知らぬ他人のほうが母親よりも、この子にふさわしい曲を決められるなんて。
「それはどうやって選ぶんですか？」
美咲はあえて聞いてみた。
「ええと、選ぶというかですね」
店員はまじめな顔で答えた。
「お客様の心の中に流れている曲を聴かせていただいて、それを使います」
意味がわからない。黙っている美咲にはかまわず、彼はテーブル越しに身を乗り出した。
「実は、当店ではその方法を一番おすすめしています。これまでたくさんのお客様にご満足いただいてきました」
美咲は沈黙を守った。心の中の曲を聴くだなんて、明らかにうさんくさい。変な店に入ってしまった。もしや法外な値段をふっかけてくるのだろうか。
「いかがでしょう。お試しになりますか」
「でも、お高いでしょう」
遠回しに断ったつもりだったが、店員はぶんぶんと首を振った。
「とんでもありません。できる限り、お求めやすくさせていただいています。当店が自信を持っておすすめしているものですから」
値段を聞けば、確かに既製品と変わらないようだった。完成してから、もしも気に入らなかった場合には、返品もできるという。
「じゃあ、それでお願いします」
納得したというより、ふたりのやりとりを見守っている悠人の心配そうな表情が、美咲には気にかかったのだ。これ以上、押し問答を長びかせたくない。

「ありがとうございます」
店員は神妙に頭を下げた。
「それでは、少しお時間をいただけますか」
美咲ではなく悠人に声をかけ、テーブルのひきだしからぶあついノートを取り出した。
（中略）
店員は美咲の視線を気にするでもなく、机の上に出したノートを開いた。中は五線紙だった。ペンを手にとり、悠人の顔をまじまじと見据(す)え、それから目をつぶった。芝居がかったといえなくもない一連の動作を、美咲は［D］にとられて見守った。
数秒だったか、数十秒だったか、彼はじっとまぶたを閉じていた。そして、やにわに目を開け、五線紙の上に猛然とペンを走らせはじめた。のんきそうな雰囲気から一変して、なにかに急(せ)きたてられているような、ただならぬ勢いだった。美咲は気圧(けお)され、ただ眺めていた。悠人はまじめくさった顔をして、身じろぎもしなかった。
（中略）
店は先週と変わらず、ひっそりと静かだった。
「いらっしゃいませ。お待ちしておりました」
店員は美咲たちを覚えていたようで、にっこり笑った。奥のテーブルの前に、すでに椅子がふたつ出してある。
「どうぞ、おかけ下さい」
愛想よくうながされ、美咲は悠人と並んで腰かけた。いつ来ると約束していたわけでもないのに、ずいぶん準備がいい。
「おふたりの足音が聞こえたので」
美咲の内心を見透かしたかのように、店員が言った。
（中略）
「では、お聴きになりますか」
前のめりの体勢とまっすぐなまなざしが、教室で描いた絵やつんできた草花を見せてくるときの悠人と、そっくりだった。
美咲は隣(となり)を見やった。両足をぶらぶらさせてジュースを飲んでいた悠人が、こくりとうなずいた。
「こちらです」
店員がテーブルの下から青い小箱を出し、悠人の正面にそっと置いた。
「どうぞ」

悠人が両手を伸ばして箱を引き寄せた。ふたを開け、中の器械に目を落としつつ、細い持ち手を指でつまんでそろそろと回しはじめる。

流れ出したのは、子守唄だった。

速くなったり遅くなったり、たどたどしかった旋律は、やがて安定した。素朴な音色を、美咲は呆然として聴いた。

よく知っている曲だった。美咲自身が、何度となく歌った。悠人のために。

めったに泣いたりぐずったりしない赤ん坊だった悠人だが、寝つきだけはあまりよくなかった。世界で起きているはずの楽しいことをどうしても見逃すまいと心に決めているかのように、つぶらな瞳をぱっちりと見開いて、いつまでも眠ろうとしなかった。まだ耳のことを知る前、息子を眠りに誘おうと、美咲は繰り返し歌った。あるときは腕に抱き、揺すってあやしながら。あるときはベッドに寝かせて、ぽんぽんと優しくおなかをたたいてやりながら。

わたしの声は、⑤この子に届いていた。

美咲の目の前で青い箱がにじんだ。ゆるやかに動いている、悠人のぷっくりした手もぼやけた。とっさに紙ナプキンをつかみ、目もとに押しあてる。

オルゴールの音がとぎれた。

薄いナプキンはたちまち湿ってしまい、美咲はポケットからハンカチを出した。何度も目を拭っている間、悠人がぎこちなく背中をなでてくれた。あたたかい手のひらの感触が、心地いい。

この子はわたしが考える以上に、いろんなことを学んでいるのだ。

（瀧羽　麻子「ありえないほどうるさいオルゴール店」より）

問　一、――線①「年季の入った」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、すっかりさびれはてた　　イ、年を経て古くなった　　ウ、独特な趣のある　　エ、堂々としたたたずまいの

問二、A〜Cにあてはまる言葉として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、かちんと　　イ、きょとんと　　ウ、ぎょっと　　エ、もやっと　　オ、ぴくりと　　カ、むっと

問三、――線②「一拍遅れて」とありますが、悠人が顔を上げるのに「一拍遅れ」たのはなぜですか。その理由がわかる部分を文章中から十四字で探し、抜き出して答えなさい。

問四、――線③「かっと熱くなった」とありますが、美咲が「熱くなった」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、取り乱している自分とは対照的に落ち着き払っている店員から、馬鹿にされた気がして腹がたったから。
イ、店員の謝罪の言葉から、お店の雰囲気にそぐわない自分の行き過ぎた言動を再認識したから。
ウ、悠人が行方不明になったと早合点した自分の感情的な行動が、恥ずかしくてたまらなくなったから。
エ、悠人を案じるあまり、必要以上に過保護になっている母親だとみなされたことが不本意だったから。

問五、――線④「まるで」が係る部分を次から選び、記号で答えなさい。

まるで、ア子どものイものをウ親がエ勝手にオ決めるなんてカかわいそうだとキいわんばかりだ。

問六、Dにあてはまる言葉をひらがな三字で答え、慣用表現を完成させなさい。

問七、――線⑤「この子に届いていた」とありますが、美咲がこのように思ったのはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、指定された字数で文章中から探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

悠人の［1、十字］が、昔美咲が寝つきのよくない息子のために繰り返し歌った、［2、三字］であることが、オルゴールの音色から分かったから。

問八、この作品を通して、悠人はオルゴールのどのようなところに魅力を感じていると思われますか。「～ところ。」につながるように、文章中から五字で探し、抜き出して答えなさい。

問九、この作品について生徒たちが話し合いました。次の会話の中で、適当でないものを二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、生徒A―美咲は、悠人のことを人一倍心配しながらも、悠人の気持ちを量りかねているところがあるように思えますね。

イ、生徒B―そうですね、でも美咲は、悠人のことをこれまで母親として親身になって常に考えてきた、子ども思いのお母さんに映ります。

ウ、生徒C―一方、美咲には消極的な一面もあって、店員に勧められたオルゴール購入を断りきれなかったんだと思います。

エ、生徒D―悠人は、聞き分けが良いばかりでなく、ずっと深いところで、母親の愛情を感じ取っているのではないでしょうか。

オ、生徒E―店員は、オルゴールの選曲を通じて、いつしか生まれた美咲と悠人の心の距離を解消していく役割を担っているように受け取れるのですが。

カ、生徒F―親子のつながりが時としてもたらす不思議な力を、オルゴールが描き出しているようにも感じました。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。設問の都合上、本文には一部省略した箇所があります。

格差が増大している今の状況をこのまま放置していけば、ディストピア(注1)になる可能性も大いにあります。ほんの少数の人間が富を握り、身体的にも精神的にも優位に立ち、残りの人間は家畜同然で重労働を強いられ、低質、悪質な環境下に置かれる。そういう世界です。

共感力は、人間同士の信頼関係を構築するために、もしくは高めるために使われてきました。これによって社会の力は高まったのです。[A]、共感力の爆発は暴力も生み出しました。特に集団間の暴力は、今、集団の結束力を高めるために使われています。敵をつくり出すことで結束力は強まる。それが、幸福につながるという①誤解が生じています。

どこかで制度を改善しないといけない。その際には、平等な社会というコンセプト(注2)だけではなく、「人間は一人一人違う」を前提とした個性と多様性を尊重するコンセプトも取り入れていかないといけません。身体的、あるいは文化的な背景が違う人々が集まって平等な権利を行使できる社会づくりをすべきです。

世界(注3)に再びグローバルな動きが広がったときに重要になるのは、人と人とを結びつける接着剤をどうつくるかでしょう。宗教も今は接着剤にならなくなりました。接着剤が失われたために、言い方を換えれば、科学技術が人と人をつなぐ接着剤の役割を果たすどころか、バラバラにしてしまう方向に進んだために、一国主義が台頭しているのです。別の仕掛けをつくる必要があるのに、まだぼくたちはそれを手に入れていません。頭の中にさえ描けていないのかもしれません。早急に②それを考え出す必要があります。

今、日本でも欧米でも、西洋哲学と近代科学を唯一のよりどころとして文明を推し進めてきたことを反省しようという動きが強まっています。早急に新たな発想を取り入れていかないと地球は崩壊してしまう、と。西洋哲学は、主体性をもっているのは人間だけであるというスタンスです。近代科学にとって、環境は人間が管理するものです。環境を変えることで人間に都合のよい世界をつくっていくことが大事であり、技術はそのためにあるという考えです。こうして③主体と客体をはっきり分け、自然を管理してきた結果、今日のような大規模な自然破壊が起きました。プラネタリー・バウンダリーという言葉を聞いたことがあるでしょうか。これは、「地球の限界」ともいえるもので、「それを越えなければ人類は将来も発展と繁栄を続けられるが、越えると、急激な、あるいは取り返しのつかない環境変化が生じる可能性がある」境界のこと。今すでに九つの項目のうち四つが境界を越えたとされています。

こうした中で注目されているのが、東洋哲学の中にある「容中律」（肯定でも否定でもなく、肯定でも否定でもある、とする論理）の概念なのです。これは、0か1、その間を許さない西洋発の概念「④排中律」（どのような命題も真か偽のいずれかであるとする論理）の逆を行くもので、わかりやすくいえば、両方の存在を許すことです。日本には、20世紀の前半から、西田幾多郎や和辻哲郎ら、人間と自然を一体化して捉(とら)える学者が登場していました。ぼくの大師匠の今西(注4)さんも、人間以外の生物にも[B]があり、環境と生物種は相互に影響を与え合って「生活の場」をつく

っていると主張していました。

「移民か、移民でないのか」「アメリカに利するものかそうでないか」「敵か味方か」「お前はどっちか」と迫るアメリカのトランプ大統領の発想はまさに排中律です。「どちらでもある」ということが言えれば世界は変わるのに、それができずに、世界は行き詰まりを見せています。［C］、それを解決する手段として「容中律」という哲学、科学のあり方が⑤模索されているのでしょう。

今、世界はとことん正解しか求めません。それが分断につながっています。世界は本来、「実は正解がいくつもある」というものに満ちています。たった一つの正解に至らなくても、決定的に不正解に陥らなければ、戦争も起きないし、命も失われません。

考えてみれば、今のデジタル社会も、0か1かという発想でつくられています。その中間も、「どちらも」という考え方も許されません。それも排中律の概念に基づくもので、だからデジタル空間には「間」がありません。「仲間なのか、仲間ではないのか」と迫るＳＮＳの世界がまさにそうでしょう。仲間でありつつ仲間でないという発想がなぜできないのか。どちらにも属するかもしれないし、どちらにも属さないかもしれないという「間」の発想が世間一般に広がれば、もっといろいろなことが楽になるはずです。ネットワーク社会の特徴である点と点とのつながりを、弱点ではなく利点として応用すればいいのです。

科学技術と同じく、ネガティブ(注5)な方向に使われ始めてしまった⑥「言葉」も、人間は変えることができるのではないかと思っています。むしろ、ぼくたちは言葉の壁を越える技術をもたなくてはいけない。たとえば、今はまだ同時通訳機は、文字に変換されたものを機械が読んでいるだけですが、技術が進歩すれば、ひょっとしたら対話までできるようになるかもしれません。

今は英語の時代といわれていますが、これからどれくらい続くかわかりません。１００年前までの日本は漢文の時代だったし、世界ではフランス語、スペイン語の時代もありました。同時通訳機が登場して、英語すら学ぶ必要がなくなる可能性もあります。言語が均質化するのではなく、文化や歴史を背負ったまま言語が通じるグローバル化が進むかもしれません。経済はいち早くグローバル化しましたが、文化の壁を乗り越えることはまだできていません。その境界をうまく溶かして世界を調和させる方策を手に入れることができれば、それが新しい時代を生み出すことになるでしょう。

ぼくたちおとなは、今の自分たちの頭の中にあるものからしか未来を創造できません。今の若者たちは、ぼくたちよりＡＩを使える頭脳をもっています。人間の頭で考えられること以上のものをつくり出す可能性がある。たとえば、囲碁も、目的をもって新たなアルゴリズム(注6)をつくる作業を得意とするＡＩのほうがうまいですね。「創発」という言葉を聞いたことがありますか？　たとえば、一匹一匹のアリがしていることをそれぞれ見ると、とても単純なことをしているように見えます。しかし、個々の動きが相互に作用することで、立派な巣が出来上がり防衛も子育ても分担できるという、全体では思いもよらない高度な秩序が生まれる。脳についても一つひとつの神経細胞がやっていることは単純な電気刺激の受け渡しですが、脳全体で見れば途方もない知的な活動をしています。そういう現象を「創発」と呼び、生物学、情報科学、社会学などさまざまな分野

で引用されていますが、ＡＩを利用した創造を繰り返していけば、どこかで、思いがけない「創発」が起こるかもしれません。

人間の未来は、とんでもない方向に進む可能性もはらんでいるけれど、⑦ユートピアに行き着く可能性も大いにある。ぼくはそう思っています。

（山極 寿一「スマホを捨てたい子どもたち」より）

（注１）「ディストピア」……反理想郷、暗黒世界。

（注２）「コンセプト」……発想、考え。

（注３）「世界に再びグローバルな動きが広がったとき」……本文は、新型コロナウイルス拡大防止のため世界規模で人々の流れが制限され始めたころに書かれている。当時のアメリカ大統領はトランプ氏が務めていた。

（注４）「今西さん」……日本の霊長類研究の草分けで、元京都大学名誉教授の今西錦司氏。

（注５）「ネガティブ」……否定的なさま。消極的なさま。

（注６）「アルゴリズム」……一連の手順のこと。

問　一、［Ａ］・［Ｃ］にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、Ａ―また　　Ｃ―よって

イ、Ａ―ところが　　Ｃ―そのうえ

ウ、Ａ―一方で　　Ｃ―そして

エ、Ａ―しかし　　Ｃ―だから

問　二、――線①「誤解が生じています」とありますが、どのような「誤解」が「生じてい」るのですか。そのことを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉をできるだけ文章中の言葉を使って三十字以内で答えなさい。

［三十字以内］という誤解。

問三、――線②「それ」の内容を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、人と人との信頼関係を作り、社会の力を高める仕掛け
イ、特定の国や人々だけが富を得る社会を阻止（そし）する仕掛け
ウ、科学技術によって、人と人がより良く結びつく仕掛け
エ、宗教と科学技術が効果的に人と人の信頼関係を作る仕掛け

問四、――線③「主体と客体をはっきり分け」とありますが、これと反対の内容を具体的に述べた部分を文章中から十四字で探し、抜き出して答えなさい。

問五、――線④「排中律」として文章中で述べられているものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、ネットワーク社会の特徴である点と点とのつながり
イ、環境と生物種の相互の影響
ウ、どちらにも属すること
エ、どちらかにしか属さないこと
オ、どちらにも属さないこと
カ、ＳＮＳ
キ、ＡＩ
ク、デジタル空間

問六、［B］にあてはまる言葉を文章中から三字で探し、抜き出して答えなさい。

問七、――線⑤「模索」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、目的達成のためのより良い手段を、効率よく探っていくこと。
イ、見当のつかない物事を、あれこれと考えながら探っていくこと。
ウ、悩みながらも物事を解決しようと、人々が共に努力すること。
エ、困難があっても情報収集を重ね、人々と共に努力すること。

問八、――線⑥『言葉』も、人間は変えることができるのではないかと思っています」について、次の各問いに答えなさい。

1、筆者が、「言葉」を変える必要があると考えているのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、言葉が、異なる文化の間のコミュニケーションを妨（さまた）げる要因になっているから。
イ、言葉が様々な使われ方をするため、これまで多くの誤解を生んできたから。
ウ、言葉だけに頼っていては、今後ＡＩとの関係を築くことが出来ないから。
エ、言葉が国力を表す指標になり、国家間の富の差を生む要因になっているから。

2、筆者は、「言葉」がどのようになることが望ましいと考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、機械による言語学習を効率よく進め、世界中のどの地域でも特定の数種類の言語による対話ができるようになること。
イ、できるだけ多くの国で文化や歴史の学習を促し、世界のどの地域でも言語が同じように尊重されるようになること。
ウ、世界中で、特定の一言語だけではなく、どの言語でも対等にコミュニケーションができるようになること。
エ、一言語による通訳機の開発・発展を急ぐなどして、世界中で平等にコミュニケーションができるようになること。

問九、――線⑦「ユートピア」とありますが、筆者の考える「ユートピア」とはどのようなものですか。そのことが分かる部分を文章中から三十七字で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問題は次ページに続きます。

四　次の記事は、二〇二一年三月二十三日付のものです。文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈♪家の中では　トドみたいでさ　□　してて　あくびして……〉。忌野清志郎(注)が歌う「パパの歌」である。父親のさえない描写から始まるが〈だけどよ〉でテンポが上がる。

〈昼間のパパは　ちょっとちがう　昼間のパパは　光ってる　昼間のパパは　①いい汗かいてる〉。１９９０年に建設会社のＣＭで流れた。男の仕事にだけ焦点をあてる点は時代を感じるが、当時は注目されヒットした。親の働く姿が子どもの目に触れないことの裏返しでもあったのだろう。

今は在宅勤務が広がり、働くパパもママも子どもの視界に入ってきた。影響は小学生への「大人になったらなりたいもの調査」にも表れているようだ。男子の１位が前年のサッカー選手から②会社員にかわった。２位のユーチューバーをわずかに上回る。

「在宅で仕事する親を見て身近に感じたのでは」とは調査した第一生命保険の見立てだ。過去にサラリーマンが10位以内に入ったことがあるが、このところはご無沙汰だった。今回は女子も４位が会社員だ。

職場と住まいの分離は近代社会の特徴である。ゲートリー著『通勤の社会史』によると、19世紀の英国では時折コレラがはやるようなロンドンの不衛生さが問題になった。郊外に住みたいとの欲求が高まり、蒸気機関車という新技術が③それを可能にした。

コロナを避ける在宅勤務も、高速インターネットが支える。職住の再接近はおおげさに言えば歴史的な転換なのだろう。緊急事態宣言下でなくても④大事にしたい。

（朝日新聞「天声人語」より）

（注）「忌野清志郎」……日本のミュージシャン。音楽活動のみならず、その言動でも注目され、多くの若者にメッセージを残した。

問　一、□にあてはまる語として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、キョロキョロ　　イ、ウロウロ　　ウ、ゴロゴロ　　エ、オロオロ　　オ、ジロジロ

問二、――線①「いい汗かいてる」とありますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、汗をかくほどの重労働に身を置いているということ。
イ、いきいきと仕事にいそしんでいるように見えること。
ウ、好きな競技に精魂込めて打ち込んでいるということ。
エ、仕事の面で華々しい活躍をしているように見えること。

問三、――線②「会社員にかわった」とありますが、なぜ「かわった」のですか。その要因を端的に示す部分を文章中から一単語で探し、抜き出して答えなさい。

問四、――線③「それ」の指すものは何ですか。文章中から九字で探し、抜き出して答えなさい。

問五、――線④「大事にしたい」とありますが、筆者がこのように思うのはなぜですか。その理由として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、コロナの感染リスクを減らす意味で、親と子どもにとって現状在宅勤務が、最も有効な方法だと言えるから。
イ、コロナによる職住の再接近は、親と子どもの関係性を変化させる上で、歴史的転換点と言えるから。
ウ、親が在宅の形で仕事をすることは、仕事中心の働き方が変わっていく意味でも、転機の一つと言えるから。
エ、親の仕事ぶりを子どもが目にすることは、親に対する新たな視点を育てる上で、望ましいやり方と言えるから。

用紙ヨコ 上　こちらを上にしてください

令和４年度　特選コース（S特チャレンジ）

第２回　中学校入学試験問題　〔国語〕　解答用紙（２月３日午後）

注意事項
・解答は解答欄の枠内に濃くはっきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏名

受験番号

評価点

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

一　10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

二　一　二（A B C）　三　四（2 1）　五　六　七（2 1）　八（2 1）　九

三　四　五　六　七　八　九

四　一　二　三　四　五　六　七（最初～最後）　八（1 2）　九

一

1 清貧

2 筋道

3 著名

4 米俵

5 奮（って）

6 ベンゴ

7 コバン

8 サクヤ

9 ツウカイ

10 ソナ（える）

問一

問二　A　B　C

問三

問四

問五

問六

問七　1　2

問八　ところ。

問九

三

問一

問二　30　20　10　という誤解。

問三

問四

問五

問六

問七

問八　1　2

問九

四

問一

問二

問三

問四

問五

SN-P0447